



シリーズ 子どもたちの発達

『探索遊び』

子どもにとって、「いたずら」と好奇心は表裏一体なものです。1歳を過ぎ、自由に移動することが出来るようになった子どもにとって、見るもの・触れるものすべてが新鮮で、その世界はどれだけ輝きに満ちあふれた世界なのでしょう。

その自分の内側からあふれてくる好奇心を満足させるために、(まだ大人のように方法を知りませんから)「何だろう、これは？」と思ったら、とりあえずなめてみたり、掴んでみたり、投げてみたりと五感を使って知ろうとします。

それは、大人にとってはいたずらにしか見えませんが、子どもにとってはすべて探究心のあらわれです。

前回は、そういった子どもの行為……いじり遊びについてお話ししました。今回はいじることから出発した子どもの探索行動・遊びについて、皆さんと一緒に考えていきたいと思えます。

探索遊びとは、広い意味では『何かと知り合う、知らないもの・ことがらを探索して知るようになる』行動をさす遊びの名前や意味です。

子どもにとって、今まではすべて与えられる世界での出来事だったことが(もちろんその過程も大切に、自分の世界を知る大切な期間です)、自由に移動できるようになったことで、その世界はぐんと広がり、自分から好奇心のままに『知る』ことが出来るようになったのです。つまり探索することは、子どもにとっては、自分以外の環境のあらゆるものに対する認知を高めている知的な行動とも言えるのではないかと思います。そうすると、子どもの生活全体がそもそも探索遊びから成り立っているようなものなのかもしれません。

ではそのことがいじり遊びとどうつながっていくのでしょうか？

物をいじることは、手先だけでなく、視覚の発達、物の主体性・性質・形状・触感、物と物との間にある関係を経験するという大切な行為だと言うことは述べてきました。

大人もそうですが、経験の積み重ねが知識となっていきます。子どもの発達にもそのことはとても大切なことといえます。

子どもがよくすることの一つに、入れ物にいろいろなものをいれたり出したりする遊びがあります。

はじめはその入れ物一つをいじりつくし、「これは何だろう？」と知ろうとします。次第にそれが容器であり、物が入ることを知っていきます。そして知ったことを元に、実際にいれてみるのです。これは入った、じゃあ次は違うものをいれてみようかと挑戦もします。物による性質で入らないものも出てきます（大きさや長さ・硬さなど）。そこで物によっては合わない物があることを知ります。知ったことを元に、今度は予想もします。「じゃあコレなら入るだろうか？」

容器自体も違うものならどうかと試してもみるでしょう。

容器一杯になるまでものをいれることを繰り返すことにも、1つのものに他のものをいれていくとある時一杯になるという、2つの物の間にある関係が量として経験されるわけです。どこまで入るか、容器によってはどうなのか、いれるものによってはどうなのかと子どもながらに試行錯誤し、さらにそのことを経験を通して学んでいます。

また、容器にいれる時も、どうしたらいれやすいのか工夫してる姿があります。例えば、保育ルームにはチェーンリングというおもちゃがあり、長さも様々なのですが、ペットボトルにそのチェーンリングをいれる時に、当然ですが長さにより難易度があがります。短いのが簡単にいれられることが出来るようになると、長いのに挑戦するわけですが、上手く入りません。するとどうするか？

何度もチャレンジを繰り返しながら、2回にわけて入れてみたり、もう片方の手で補助しながらいれようとしていたり、自分のすることも考えて工夫するのです。

子どもはしたいことを達成させるために、道具の組み合わせとかだけではなく、自分の行為も変化させていくのです。

子どもはいじることで蓄えた知識を使って、予想したり、結果を見立てたり、挑戦し、その結果はどうだったのか、確認したり、予想と違ったなら次はこうしてみようと工夫する…思考しているのです。

つまり子どもの探索遊びには、目的と手段、そして原因と結果があるといえるのではないのでしょうか。

子どもの遊びが知的な行為だと言われるのはそこだと思います。大人のように論理的に言えないまでも、子どもは経験により認知を高めており、そのことは身体で覚えていっているのです。

子どもの探索遊びは、比較的身体を動かさずにじっくりと遊ぶことが多いように思いますが、それだけではありません。

這ったり、歩いたりする身体を使うことも探索遊びの一つです。ご家庭でも子どもがよく狭い隙間に好んで入っていきこうしたり、高いところに登ろうとしたりする姿が見られると思います。これは自分を取り巻く世界のひとつ・空間と空間関係について知ろうとしているのです。

狭い所に入っていきことは、自分の身体を使って、その空間の広さを知ることを試している姿でもあります。高いところに登ることも高いー低いということを知ろうとしているのです。私たちの保育ルームではオープンなスペースの中に、子どもが試せるそういった空間を家具やベットなどの配置によりあえて作っています。入れそうで入れないような微妙な空間や、逆にすっぽりはまることの出来る空間、丁度そこで一人が遊べるような空間、高さも色々変えて経験できるようにベンチやマット、箱や籠など置いてみます。

子どもは感覚で覚えていくので、試せる幅を広げていくのは私たち大人の役割だと思います。

しかし、空間ということも含めて、家庭では限られた環境しかありません。それは保育ルームなどの施設とは違い、生活する場でもあるからです。子どもに触られたくないものや場所、時間があるでしょう。そのことを知らせながらも、子どもの好奇心を満たし、発達への意欲を育ていくということは大人の課題でもあります。簡単なことではありません。

でも工夫をしていくことは出来ると思います。

例えば空間。家具と家具とにちょっとした隙間を作ってみる(出たり入ったり試すだけでなく、ものも入るかどうか試すかもしれません)、食事用などのテーブルの足と足に大きな布を縛り付けておく(隠れる空間、イナイナイバアー をしたりも出来ます)、ダンボール箱やおもちゃを入れ

ておくようなプラスチック製の籠を一つ置いてみる(中に出たり入ったりするだけでなく、逆さにして登ったりもできます)、子どもが開け閉めしていい引出しを一つだけ作っておく、などちょっと出来そうなこと探してみませんか？

そして道具。多分ティッシュペーパーは魅力的で、下に置いてあると中味を引っ張り出すことでしょう。それは困ると思います。なので、あいたティッシュペーパーの箱にハンカチなどの布を入れておいてみては？飲み終えたペットボトルやコーヒーの空き瓶などの容器(ふたがついていると開け閉めもして楽しめます)とチェーンリング、お手玉など組み合わせていれることが出来るもの。家の中をぐるっと見回してみても使えるようなものはありませんか？

工夫することと平行して、やはり危険を知らせていくことも大切です。どうしても、許可できない物・事については繰り返し知らせていくことは必要なことです。子どもは感覚で覚えていくと言いましたが、禁止することも、繰り返しなのです。子どもはまだ記憶としては持続できません。なので、大人が譲れないことは伝えていき、子どもが次第にこのことはいけないのだな、と知るようになるまで繰り返すことなのです。忍耐が要りますが、それが近道であることもまた事実です。場面場面で禁止する事項を変えることはオススメしません。子どもが混乱するからです。

子どもが探究心を満たし、知的にも身体的にもより良く発達していける環境を、私たちも日々の身近な生活からも探し出すことを意識しています。何か使えるものはないか？工夫できることはないか？みなさんから何か試してみて、「こんなものを子どもが楽しんだ！」ということがあれば教えて頂きたく思います。子どもと同じように私たち大人も『探索』してみたらどうでしょうか。

柏市駅前認証保育園 Kid's Encourage
園長 日下部樹江

